

小学校外国語教育における文字に慣れ親しむ指導の工夫

— 音韻認識能力を高める活動を取り入れて —

外国語教育研究会議

竹内 茜¹

天田 梨那²

佐藤 博臣³

中川 正博⁴

要 約

平成 23 年度から小学校において外国語活動が必修化され、コミュニケーション能力の素地を養うことを目標として、聞くこと、話すことが中心の学習指導が行われてきた。子どもたちは小学校で外国語の音声に慣れ親しんできているが、中学校入学後の短い期間でアルファベットの書き方を習い、すぐに読むこと、書くことに取り組まなくてはならず、大変さを感じている様子が見られる。

平成 29 年 3 月に告示された新学習指導要領では、小学校高学年での外国語の教科化と時間数増、中学年での外国語活動が新設された。外国語科では、聞くこと、話すことに加え、読むこと、書くことの領域が新設され、文字指導もしていくことになる。

その際に、中学年から系統的、段階的に文字に出合わせることが、子どもたちに負担をかけずに文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませることにつながるのではないかと考えた。段階的な指導の中に、文字指導において重要とされている音韻認識能力を高める活動を取り入れ、音と文字の認識の手助けになるようにした。さらに、指導計画の中に短時間学習を位置付け、その中にも文字に触れる機会を設定し、学級担任のみで指導が可能な具体的指導方法を示した。

検証授業を通して、短い時間で段階的に、繰り返しアルファベットを扱うことで、子どもたちは無理なくアルファベットに慣れ親しんだ後、音声で十分に慣れ親しんだ語句を抵抗なく書き写すことができるようになることが分かった。

キーワード：文字指導 小学校外国語 アルファベット 文字の認識 短時間学習 音韻認識

目 次

I 主題設定の理由	34	(1)アルファベットに慣れ親しむ活動	39
1 新しい学習指導要領における外国語教育の目標	34	(2)音韻認識能力を高めるための活動	40
2 これまでの外国語活動の取組	36	(3)短時間学習の内容	40
3 外国語教育の課題	36	(4)文字指導	41
(1)川崎市の外国語活動の授業の現状	36	3 授業の実際	41
(2)授業時数の確保	37	(1)検証授業1 小学校6年生	41
(3)文字指導	37	(2)検証授業2 小学校4年生	44
4 研究主題の設定	38	(3)検証授業3 小学校6年生	46
II 研究の内容	38	III 研究のまとめ	49
1 研究の目的	38	1 研究の成果	49
2 研究の構想	39	2 今後の課題	51
		参考文献・指導助言者	52

¹川崎市立下小田中小学校教諭（長期研究員）

²川崎市立富士見台小学校教諭（研究員）

³川崎市立百合丘小学校教諭（研究員）

⁴川崎市立中原中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 新しい学習指導要領における外国語教育の目標

平成 29 年 3 月に告示された新学習指導要領では、小学校高学年に年 70 単位時間の外国語科、小学校中学年に年 35 単位時間の外国語活動の時間が新設された。外国語科の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」¹、外国語活動の目標は、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す」²と示された。高学年の外国語科では、外国語で読むこと、書くことの領域が新設され、指導していくことになった。小学校外国語活動・外国語研修ハンドブックには、「英語に慣れ親しんだ段階で、文字を導入し、『読むこと』『書くこと』の初歩的な活動を導入することは、内容理解を進め、学習を促す効果がある」³と記されている。

これまでの高学年での外国語活動は、聞くこと、話すことが中心であった。担任や ALT、デジタル教材や友達の話す英語を聞いたり、学習目標となる文を使いながら、自分の考えや気持ちを話したりすることがほとんどだった。子どもたちは、音声で聞いて慣れ親しんだものを口に出して表現するだけで、文字が扱われる場面はほとんどなかった。例えば、そこで扱われる単語の絵カードに文字が示されていることはあっても、それを積極的に読んだり、書いたりすることはなく、文字が扱われるのは主に中学校に入ってからであった。文字を扱わなくても一定の成果を上げてきた外国語活動ではあるが、高学年の子どもたちは、抽象的な思考力が高まる時期であり、後に残すことのできない音声だけで慣れ親しみ、学習を深めていくことには限界があることも指摘されてきた。

2 これまでの外国語活動の取組

平成 23 年度から、小学校高学年に年 35 時間の外国語活動の時間が位置付けられた。川崎市ではその 2 年前より先行実施をして、「コミュニケーション能力の素地の育成」を目指して取り組んできた。

授業は、主に“Hi, friends!”のテーマに沿って各学校で単元計画を練り、担任が T1、ALT が T2 という役割で進めてきた。子どもたちが自分で判断したり、選択したり、何かを新しく作ったりするような活動がゴールとなるよう最初に設定をし、それに向けて逆向きの授業設計をして、担任が創意工夫しながら授業を行ってきた。

平成 28 年 12 月 21 日に示された答申⁴では、小学校外国語活動の成果と課題を次のように整理している。

- | | |
|----|--|
| 成果 | ○外国語に対して、児童の高い学習意欲がある。
○中学生の外国語教育に対する積極性の向上といった変容などの成果が認められる。 |
| 課題 | ●音声中心で学んだことが中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない。
●国語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係、文構造の学習において課題がある。
●高学年は、児童の抽象的な思考力が高まる段階であり、より体系的な学習が求められる。 |

¹ 小学校学習指導要領解説 外国語編 文部科学省 平成 29 年 6 月 p. 8

² 小学校学習指導要領解説 外国語活動編 文部科学省 平成 29 年 6 月 p. 8

³ 文部科学省 『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』平成 29 年 6 月 30 日 p. 100

⁴ 文部科学省 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』 平成 28 年 12 月 21 日

本市での状況を把握するため、本研究会議の研究者が所属する市内の中学校1年生（122名）にアンケートをとったところ、図1に示したような結果になった。小学校の外国語活動が「楽しかった」、「まあまあ楽しかった」と答えた生徒は合わせて76%、中学校で文字を読むことが「楽しみ」、「まあまあ楽しみ」な生徒は70%、文字を書くことが「楽しみ」、「まあまあ楽しみ」な生徒は66%であった。外国語活動で聞いたり話したりして英語の楽しさを味わい、次の段階として文字に出合うことを楽しみにしている様子が分かる。

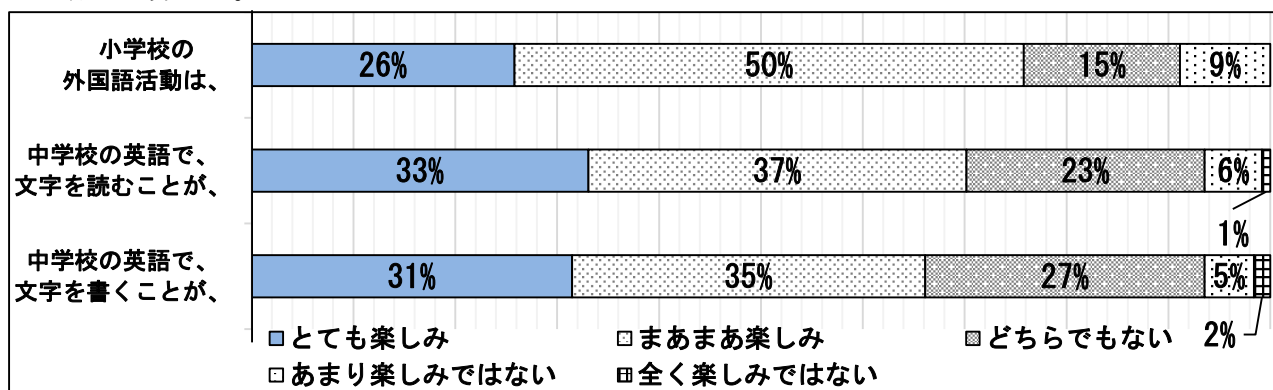


図1 中学校1年生アンケート（4月実施、122名）

このように、外国語活動を経験している高学年の子どもたちは、文字を読んだり書いたりすることに興味をもっていることが分かる。実際に授業の中でも、友達に何かを伝えたり、紹介したりする場面で、自分の話す内容をメモしたいという子どもたちがいたり、初めて提示する絵カードでもそこに文字が書かれていれば、読もうとする子どもたちがいたりした。しかし、子どもたちが文字に関してこのような思いをもっているからといって、安易に文字を読ませたり、書かせたりする指導が適切なのかどうかは考えなくてはならない。

新学習指導要領の外国語科では、読むことの領域目標として、「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする」そして、書くことの領域目標として、「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする」と示されている。これは、機械的に練習として文字を書かせるのではなく、今までに聞いたり話したりして、十分に慣れ親しんだものを読んだり書いたりするということである。そして、これは子どもたちが自分の考えや気持ちを表現する内容になるべきものであり、教師側から一方的に提示して書かせることではない。また、『読むこと』、『書くこと』については、中学年の外国語活動では指導しておらず、慣れ親しませることから指導する必要があり、『聞くこと』、『話すこと』と同等の指導を求めるものではないことに留意する必要がある⁵と示されている。聞いたり話したりすることとは異なり、読むことや書くことは、これらの領域が新設された外国語科においても十分に時間をかけて系統的、段階的に取り組まなくてはならない。

現行の学習指導要領では、共通教材“Hi, friends! 1 Lesson 6”でアルファベットの大文字、“Hi, friends! 2 Lesson 1”でアルファベットの小文字を扱っているが、その単元だけの扱いであり、子どもたちが繰り返し目にしたり、十分に慣れ親しんだりする時間は少なかった。アレン玉井⁶は、「英語の単語のスペルを認識するには、アルファベットを一文字ずつ聞いて理解できる程度の知識では足りず、複数のアルファベット文字を早くかつ正確に認識できる力、または音を聞いて文字が書ける程度の力が必要である」と述べている。アルファベットを一文字ずつ扱っただけですぐに単語を読んだり書いたりする活動をすることは、子どもたちに大変さを感じさせることにつながっていると考えられる。

⁵ 小学校学習指導要領解説 文部科学省 平成29年6月 p.11

⁶ アレン玉井光江 『小学校英語の教育法—理論と実践』 大修館書店 2010年 p.137

3 外国語教育の課題

(1) 川崎市の外国語活動の授業の現状

本市では、平成 20 年度から文部科学省が必修とした各学校一名の中核教員研修を継続して行っており、平成 26 年度からは中央研修を受けた英語教育推進リーダーを活用した研修を行っている。中核教員が研修を受けて、それを各学校での校内研修において生かすことになっている。

こうした取組の中で、実際に外国語活動を行っている教員はどう感じているのか、外国語教育中核教員研修参加者（111 名）にアンケートをとった。項目は、

- ① 外国語活動の授業をするにあたり、英語力に自信があるか。
- ② 外国語活動の授業をするにあたり、その指導に自信があるか。
- ③ 外国語活動の授業では、ALT に頼りきってしまうことがあるか。
- ④ 外国語活動の授業に向けて、全校での取組（教材研究や研修）が行われているか。
- ⑤ 外国語活動の授業は、このようにすればよいというイメージがもてているか。

である。

結果は図 2 に示したようになった。現在、小学校で担任をしている教員は、大学で各教科教育については学んできているが、英語教育については学んでいない者がほとんどである。①の英語力について、②の指導力については7割近くの教員が「自信がない」または「あまり自信がない」と答えている。まだまだ外国語教育を行うに当たって不安な様子が見え、そのことが、③の ALT に頼りきった授業をしてしまう結果につながっていると考えられる。

また、④の全校での取組についてであるが、現在外国語活動が行われているのは高学年だけである。高学年の担任でなければ外国語活動の授業を担当しない場合もあり、全教員が同じように外国語活動の研修に必要性を感じておらず、全校での取組が進んでいないことが予想される。そして、⑤のイメージについては、ほとんどの小学校教員は、中学校で初めて英語の授業を受けており、小学校での外国語活動の授業を経験していない。校内や校外で意識的に授業参観をしなければ、外国語活動の授業を目にすることがないので、英語をその都度日本語に訳してしまうような方法で外国語活動の授業をしてしまい、本来の外国語活動とは異なるものになってしまうと推測される。

このような結果から、担任が外国語活動の授業を進めていくことは困難さを抱えていることが読み取れる。さらに拡充される小学校での外国語教育がよい方向へ進むよう、この研究で適切な指導方法を提案したい。

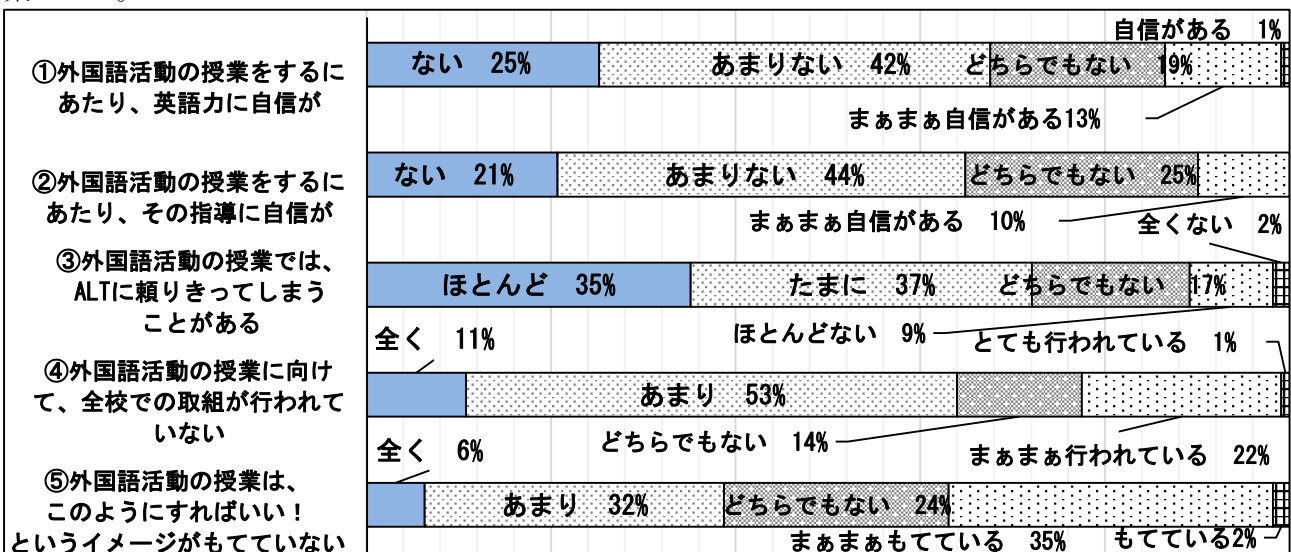


図 2 外国語担当者アンケート（7月実施）

(2) 授業時数の確保

新学習指導要領に対応した外国語教育を行うにあたり、直面するのは授業時数の確保である。現時点でもほとんどの小学校では、高学年はクラブ活動・委員会活動を除いて1週間に28時間の授業が行われている。これ以上6時間目までの日を増やせば、子どもたちにも教員にもより負担がかかることになる。

新学習指導要領の総則では、短時間学習について、「各教科等の特質に応じ、10分から15分程度の短い時間を活用して特定の教科等の指導を行う場合において、教師が、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通した中で、その指導内容の決定や指導の成果の把握と活用等を責任をもって行う体制が整備されているときは、その時間を当該教科等の年間授業時数に含めることができること」⁷が示されている。また、新学習指導要領の外国語⁸では、児童が英語に多く触れることが期待される英語学習の特質を踏まえ、短時間学習を利用して指導の効果を高めるよう工夫することが述べられている。現行の学習指導要領では、週1回しか触れられなかった英語に、例えば、週3回(45分×1回+15分×2回)触れられるようになれば、子どもたちは、より英語を身近なものに感じ、慣れ親しみやすくなるのではないかと考える。真角・立花⁹は、「授業内容や学習過程に応じた短時間学習を行うことは、以下のような児童の姿が見られるなど、児童が学びの実感を得ることにつながった。○英単語や英語表現に慣れ親しむ機会が増え、次時の学習や活動に生かすことができた。○習得型短時間学習と活用型短時間学習¹⁰を通して、児童が知識・技能を習得したり達成感を味わったりすることにつながった」と短時間学習の成果を挙げている。このような成果を踏まえ、本研究会議では、短時間学習を取り入れた指導計画で研究を進めることにした。

(3) 文字指導

外国語活動では、よく絵カードを用いて単語と出合わせることがあり、そのカードには子どもたちが読めるか読めないかにかかわらず、アルファベットで単語が書かれていることがよくある。樋口¹¹は、「文字指導の利点は、文字が記憶の手立てとなり、視覚情報が加わることで内容理解が高まり、かつ高学年の知的好奇心を満たすという意見が一般的であるが、文字だけ見せて単語を読まそうとしたり、書かそうとしたりすることは、児童に大きな負担となりかねないので、その導入時期や指導内容、指導方法に関しては、十分配慮しなければならない」と述べている。

つまり、今まで目にしたことがある単語だからと言って、絵カードを見て単語を言えることとその綴りをアルファベットで言えることには、必要とされる力にかなりの差があるということである。

新学習指導要領の外国語科では、読むこと、書くことの領域が新設され、外国語活動でも聞くことの目標の中に文字に関する内容が設定された。これまでは十分に扱われてこなかった文字についてどのように指導していくかは、外国語活動や外国語科の授業を行う上で、大きな課題である。

「中高生の英語学習に関する実態調査」¹²によると、中学生の65.7%が「英語の文を書くのが難しい」、59.0%が「単語を覚えるのが難しい」と答えている。小学校の外国語活動で英語の音声に十分触れてきた

⁷ 小学校学習指導要領解説 総則編 文部科学省 平成29年6月 p.63

⁸ 小学校学習指導要領解説 外国語編 文部科学省 平成29年6月 p.62

⁹ 真角美穂・立花奈巳「学びの実感を積み重ねていく小学校外国語科学習指導の在り方—チャレンジリストの活用と短時間学習の実践を通して—」 福岡市教育センター 2017年

¹⁰ 習得型短時間学習とは、知識・技能の習得を目的とするもの。活用型短時間学習とは、習得した知識・技能を使って自分のことを伝えたり他者とやりとりをしたりすることを目的とするもの。

¹¹ 樋口忠彦 『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言』 研究社 2010年 p.166

¹² ベネッセコーポレーション 中高生の英語学習に関する実態調査 2014年

子どもたちが、中学校に入って文字に出合い、その音声と文字の関連に戸惑っている様子が見てとれる。

アレン玉井¹³は、「英語独特の音韻認識能力を持っている者の方が単語を理解する力、また文章を理解する力があるということになる」「日本人学習者の英語のリーディング能力を高めるためには、初期段階においてアルファベットの学習を徹底させ、さらに音韻（素）認識能力を高める活動を多く行う必要がある。そのような指導を受けた学習者は、音と文字との関係を理解できる素地を作り、英語を解読していく力を蓄えていく」と述べており、本研究会議での文字指導の基本的な考え方にした。

4 研究主題の設定

今までは音声中心で行われてきた外国語活動であるが、今後は担任が文字指導も含めて指導にあたらなくてはならないことになる。これまで、文字指導のスタートであった中学校の外国語教育では、アルファベット一文字ずつを少し扱っただけですぐに書いて単語の形にしたりすることが行わ

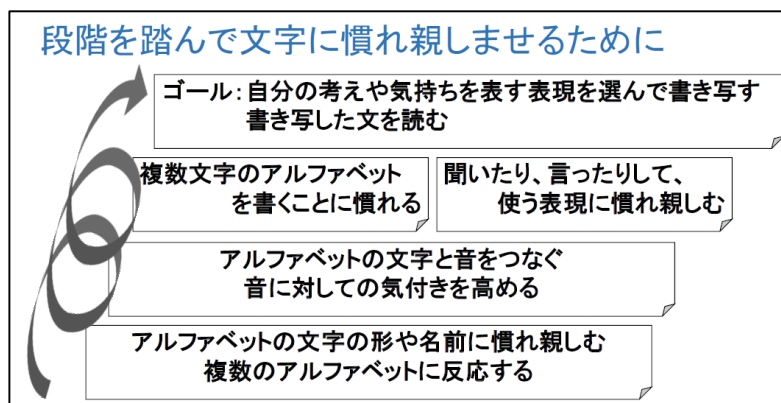


図3 段階を踏んだ文字指導の方法

れることが多かった。そのような担任自身が経験してきたこれまでの文字指導とは異なる、子どもたちが段階を踏んで文字に慣れ親しみ、習得しやすい方法で取り組ませることを大切にしたい。

そこで、外国語科の授業において、45分の授業と短時間学習を関連付けながら、段階的、系統的に文字に出合わせることで、子どもたちが文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しませることとする。

その方法として、図3のように、じっくりと時間をかけてアルファベットの文字の形や名前に慣れ親しむことから始め、音に対する気付き（音韻認識能力）を高めてから、文字を書いたり読んだりする活動に移ることが有効であると考えた。時間をかけて聞いたり、言ったり、見たりすることを繰り返し行うことが必要である。よって、次のように主題を設定した。

研究主題

小学校外国語教育における文字に慣れ親しむ指導の工夫

～音韻認識能力を高める活動を取り入れて～

II 研究の内容

1 研究の目的

これからの外国語教育では、子どもが相手に興味をもち、よりよいコミュニケーションを行うための手段の一つとして文字を使うことになる。本研究会議では、文字を扱う最初の段階として音韻認識能力を高める活動を取り入れて、段階的に文字に慣れ親しむ活動の指導計画を作成し、その実践と検証を行う。

¹³ アレン玉井光江 『小学校英語の教育法－理論と実践』 大修館書店 2010年 p.151

2 研究の構想

外国語科でも外国語活動でも、段階や程度に差はあるが、その目標は「コミュニケーションを図る」ことである。コミュニケーションという言葉は、他の教科等の目標では使われておらず、これが外国語科と外国語活動の特色だと言える。そして、日本語と同じようには使えない英語を使ってコミュニケーションを図るところがポイントである。

これまで、文字に頼らず音声中心で行われてきた外国語活動であるが、音韻認識能力を高める活動を取り入れて適切に文字に慣れ親しみ、読むことや書くことにつなげることができれば、コミュニケーションの幅が広がると考えられる。音声のみのコミュニ

ケーションは、その場に居合わせなければその情報は伝わらず、また、時間がたてば消えてしまう。しかし、文字にして書いて残すことができれば、時間的にも距離的にも離れた相手に情報を伝えたり、相手から情報を受け取ったりすることができる。新学習指導要領において外国語科では、読むこと、書くことの領域が新設されたが、読むこと、書くことは聞くこと、話すことを支えるものと考え、それらがゴールにならないようにすることが求められている。外国語科の授業で英語を話すことなく、文字だけを讀んだり書いたりすることにはならないようにしたいと考えた。

そのために、まずは、「音声でのコミュニケーションに使う英語表現に慣れ親しむこと」と「目的や場面、状況を設定すること」が必要になる。教室内で設定された目的や場面、状況の中で、子どもたちが想像力を働かせながら必要となる英語表現を選んで使えるようになるためには、一週間に2回の外国語学習では難しいと考えた。

そこで、子どもたちがより多くの時間、英語に触れられるようにするために、15分の短時間学習を週2回設定した。ここでは、45分の授業で扱ったゲームやチャンツなどを再度行ったり、アルファベットに慣れ親しむ活動に取り組んだりする時間として計画的に実践した。15分の学習の中で、45分の授業と関連させた内容を10分程度、アルファベットに慣れ親しむ活動は5分程度で行うようにした。

(1) アルファベットに慣れ親しむ活動

アルファベットに慣れ親しむ活動としては、Hi, friends! Plus のデジタル教材やアレン玉井が提唱した活動¹⁴を参考にして、表1に示すものを行った。指導の段階として、アルファベットの歌を歌うところから始め、複数文字のカードを並べられることを目標にした。それぞれの活動は一度だけでなく、同じものを何度か扱うようにした。

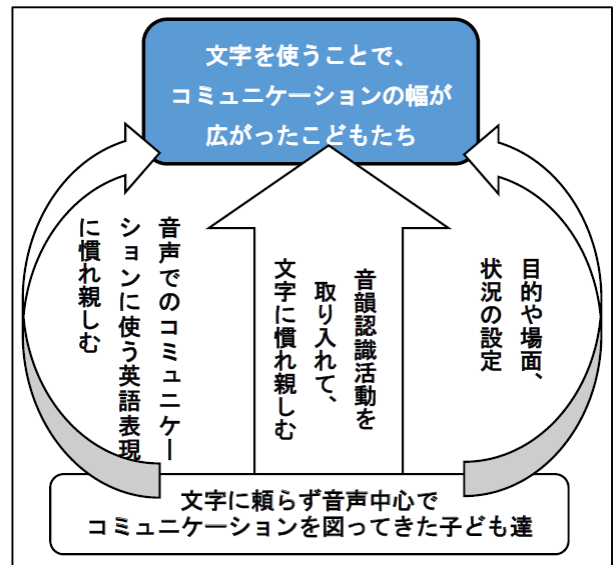


図4 研究構想図

表1 短時間学習でのアルファベットに慣れ親しむ活動

アルファベットの歌とアルファベットチャート	アルファベットの歌を歌いながら、アルファベットカードをアルファベットが印刷された台紙の上に置いていく。
逆アルファベット	アルファベットの歌を逆に歌いながら、カードを台紙の上に置いていく。
アルファベットカード並べ替え	ばらばらになったアルファベットカードをその名前を言いながら、アルファベットが印刷された台紙の上に置いていく。
アルファベットカルタ	ペアになり、教師が言ったアルファベットを繰り返してから早く取る。
アルファベット神経衰弱	裏返しにしたアルファベットカードを返し、そのアルファベットの名前を言ってからもう一枚のカードを返し、同じものだったらもらえる。

¹⁴ アレン玉井光江 『小学校英語の教育法－理論と実践』 大修館書店 2010年 pp.177-185

アルファベット 伝言ゲーム	5～6人を列に並ばせ、先頭の子にアルファベット一文字を伝える。小さな声で順々にそのアルファベットを伝えていき、列の最後の子は、そのアルファベットカードをとる。
アルファベット人文字 作りゲーム	5～6人で、カードを引いて指定されたアルファベットの形を手や身体を使って作る。
アルファベットビンゴ	アルファベットカードを3×3などの形に並べ、ビンゴゲームをする。
アルファベット カード並べ (複数文字)	教師が言った複数のアルファベットカードを素早く並べる。

(2) 音韻認識能力を高めるための活動

アルファベットの文字の形や名前に十分慣れ親しみ、複数のアルファベットに反応できるようになったら、英語の音に対する気付き（音韻認識能力）を高める活動をする。音韻認識能力とは、「話されている言葉がどのような音（音素）で作られているのかを知る力」であり、音素とは、それを母語として話す人々が「これは同じ音だ」と思う音のこと¹⁵である。英語のもつ音素には、日本語の音素にはないものがあるので、日本人が同じ音だと感じる音が、英語ではいくつかに分けられて知覚されるものもある。だからこそ、英語の音韻認識能力を高めることが、英語の文字を認識しやすくすることにつながり、読むこと、書くことにうまくつながるとされている。

そこで、アルファベットに慣れ親しむ活動を行った後に、音韻認識能力を高める活動を取り入れることで、読んだり書いたりする活動に円滑に取り組めるように計画した。具体的には、アレン玉井が行っている活動¹⁶を参考にして、ワークシート（図5）を作成し、リスニングクイズという名称で行った。

これは、アルファベットのある子音で始まる単語を聞き分ける活動であり、日本語にはない英語の音と文字を結び付けることができ、中学校以降も続く英語の文字を使った学習の第一歩になると考えた。最初はやり方に戸惑う子どももいたが、毎回同じ形で行う活動のため、続けていくうちに戸惑うことなく行えるようになった。担任は、ワークシートを配ったり、少しの指示英語を言ったりするだけで、単語の発音はALTが行った。それぞれの文字に対応するスクリプトを作り（図6）、ALTがいない時に取り組む場合は、前もって録音しておいたものを使った。

(3) 短時間学習の内容

新学習指導要領の総則で示されている通り、短時間学習は、それぞれ単独で指導が行われるものではなく、45分の授業の内容との関連が必要だとされている。本研究会議では、短時間学習の中で、①45分の授業と関連した活動と、②文字に慣れ親しませる活動を組み合わせた。

①の内容としては、45分の授業の中で一度扱ったゲームを再び行ったり、その単元で扱われる表現の入っているチャンツを言うなどして、45分の授業だけでは慣れ親しみが十分でないものを補完する形をとった。②としては、まずは表1で示した活動や *Hi, friends! Plus* のデジタル教材のアルファベット文

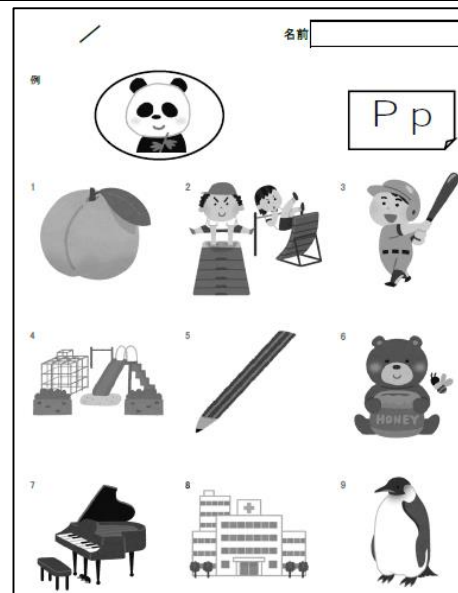


図5 リスニングクイズのワークシート

Today's letter is P.
The name is P, the sound is /p/.
For example, panda, panda. OK?
No.1 peach, peach.
No.2 P.E., P.E.
No.3 baseball, baseball.
No.4 park, park.
No.5 pencil, pencil.
No.6 bear, bear.
No.7 piano, piano.
No.8 hospital, hospital.
No.9 penguin, penguin.

Check the answers.
No.1 peach, No.2 P.E.,
No.4 park, No.5 pencil,
No.7 piano, No.9 penguin.

図6 リスニングクイズのスクリプト

¹⁵ アレン玉井光江 『小学校英語の教育法—理論と実践』 大修館書店 2010年 pp.143-145

¹⁶ アレン玉井光江 『Little Readers 1』 小学館プロダクション 2003年

字当て懐中電灯や文字当てパズルを行った。ほとんどの子どもたちはアルファベットの歌(ABC Song)が歌えることで、「アルファベットを知っている。全部覚えている」という意識があったようだが、逆から歌ってみることで曖昧な部分があることに気付いたり、デジタル教材を使って一文字ずつ扱うことで注意深く文字の形に目を向けたりすることができた。

このような活動を行った後、Hi, friends! Plus のワークシートを使って一文字ずつ丁寧に練習を開始した。ワークシートに取り組む手順としては、Hi, friends! Plus のデジタル教材で書き方例を提示した後、新出漢字の学習のように空書きを行い、3文字か4文字ずつ、ワークシートに書かせた。書くことが苦手な子どもは2回、得意な子どもや意欲的な子どもは5回など、子どもの実態によって書く回数を弾力的に調整した。大文字小文字一通りの文字練習が終わった後には、ワークシート(図5)を使ってリスニングクイズを行った。

アルファベットの学習は、長時間続けて行うよりも、短時間で何度も何度も行いたい。川上¹⁷は、「アルファベットの学習は、慣れが大変重要なので、時間をかけて行う必要がある」と述べている。中学校に比べてゆっくりと活動を進められる小学校のうちに時間をかけて繰り返し行うことで、少しずつ身につけさせたい。

(4) 文字指導

本研究会議で行った文字指導は、ドリル的な練習で機械的に書かせるものではなく、子どもたちが自分の考えや気持ちを表現するものになるように留意した。新学習指導要領の「書くこと ア」では、「語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする」と示されている。そこで、検証授業では主語や動詞を入れての一文全てを書くのではなく、自分の考えや気持ちを表現する部分のみ自分で選択して書き写すことができるワークシート(図7)を使った。



図7 授業で使ったワークシート

3 授業の実際

(1) 検証授業1 A小学校6年生 Hi, friends! 2 Lesson 3 I can swim. 関連

①学級の状況と検証授業までの取組

子どもたちは、1～4年生までに合計で25時間、5年生からは主にHi, friends!を使って年間35時間の外国語活動を経験している。6年生になってからも、週1時間のペースで担任とALTのTTによる授業に取り組んでいる。

研究テーマに合わせ、短時間学習でアルファベットに慣れ親しむ活動やアルファベットを書く活動を行っている。意欲的に取り組んでおり、同じ活動を繰り返し行うことで、担任から見ると子どもたちはかなりアルファベットに慣れてきていたが、「まだカード並べには台紙がないと無理!」と慎重な面が見られた。やはり、「間違えたら恥ずかしい」という姿も見られた。一方で、友達とのやり取りやチャンツなど英語を話す場面では、なかなか大きな声で発話することが少なかったが、回を重ねると自信をもち、多少の間違いがあっても英語を口にするようになった。また、分からないことがあると友達同士で教え合う姿もよく見られ、外国語活動の授業だけでなく、普段から学習に対するこのような態度が育まれていることがうかがえた。

¹⁷ 川上典子 「英語教育における小中連携：文字指導のあり方」 2014年 p.15

②検証授業計画

現行学習指導要領の共通教材である Hi, friends! を元に、移行期の教材の内容を加えて単元構成を行った。この時点ではまだ新教材の内容が全ては明らかになっていなかったの、内容を推測しながらの実践だった。検証授業で扱った Hi, friends! 2 Lesson 3 I can swim. の単元では、can や can't を使って、自分のできることやできないこと、友達にできることを尋ねることを目標としている。ここに、文部科学省作成の移行期教材で5年生の活動内容に加えられた三人称も取り入れた。このことで、書く活動を取り入れた際に活動の幅が広がると考えたからである。

基本的な考えとしては、45分の授業をメインに据え、従来通り単元のゴールを決めてから逆向きの授業設計をして、一時間ごとの内容を決めた。今回の単元のゴールは、先生方にできることやできないことをインタビューし、「この先生は誰でしょう？クイズ」をするものである。その前段階として、友達にできることやできないことをインタビューして分かったことをも

とに、三人称の He や She を主語とした文の最後の単語を選んで書き写す活動を取り入れた。この単元では、can / can't を使うので、三人称を取り入れても動詞に s を付ける必要がなく、子どもたちが混乱せずに三人称を使えるように設定されている。

図3で示したような段階を踏んだ文字指導について検証するために、45分の授業と短時間学習を関連付けて単元計画を練った。「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写す」活動を行う時間を3時間目に据えて、1時間目には can / can't および He / She の表現や意味を知るところから始め、2時間目は can / can't を何度も聞いたり言ったりして、表現に慣れ親しむ時間にした。Hi, friends! の誌面には、I can swim. という単元名が書かれているが、特に注意を向けさせなければ検証授業の3時間目までに子どもたちが“can”の文字を目にすることはほとんどない。

新しい表現である三人称については、担任が男性、ALT が女性だったので、二人のデモンストレーションから子どもたちは he が男性、she が女性を表す語だということについて、特に日本語を交えなくても理解することができると予想し、導入することにした。

短時間学習では、can / can't が出てくるチャンスを繰り返し扱ったり、Can you ~? の表現を使って友達にインタビューしたりした。週に3回英語に触れる時間を設定したので、子どもたちは無理なく表現に慣れ親しむことができた。また、毎回の短時間学習の中で5分程度は必ず、アルファベットに慣れ親しんだり、一文字ずつ書いたりする活動を行った。短い時間なので、子どもたちは集中して取り組むことができ、3～4文字のアルファベットを丁寧に書くことに気を配って行うことができた。

3時間目の書き写す活動で使う単語は、短時間学習で友達にインタビューして答えてもらったことを

表2 単元の流れ 第○時は45分授業、短○は15分の短時間学習

時	目標と主な活動
第1時	「～できる」「～できない」という表現を知り、言語にはそれぞれ違いがあることに気付く。 ○HRTとALTのできること／できないことの話聞く ○ポインティングゲーム ○ジェスチャーゲーム ○Let's Listen 1
短①	○アルファベットの活動 ○ジェスチャーゲーム
短②	○アルファベットの活動 ○Let's Chant
第2時	動を表す語や「できる」「できない」という表現に慣れ親しむ。 ○Let's Chant ○隣の人にインタビュー ○Let's Play 2 ○担任のできること／できないことクイズ
短③	○アルファベットの活動 ○Let's Chant ○友達にインタビュー
短④	○アルファベットの活動 ○友達にインタビュー (前回の続き)
第3時	自分や尋ねた友達の「できる」「できない」という表現に慣れ親しんだり、書いたりする。 ○Let's Chant ○自分や尋ねた友達のできること／できないことを書く ○自分の書いた友達の紹介文を読む
短⑤	○アルファベットの活動 ○友達の紹介文を読む (第3時の続き)
短⑥	○アルファベットの活動 ○友達の紹介文を読む (第3時の続き)
第4時	色々な人の「できる」「できない」という表現に慣れ親しむ。 ○Let's Chant ○有名人の写真を見て何ができるかを考える ○インタビューをする先生を決めて、答えを予想する
短⑦	○アルファベットの活動 ○先生にインタビューする
短⑧	○アルファベットの活動 ○インタビューしてきたことを書く
第5時	先生のできること、できないことについて積極的に尋ねたり答えたりする。 ○「この先生は誰でしょう？クイズ」(グループ) ○「この先生は誰でしょう？クイズ」(クラス) ○友達の書いた先生の紹介文を読む

メモしたものから、より多くの子どもたちが使うものを選んだ。基本的には、Hi, friends! で使われているものである。少数の子どもしか使わない単語については、個別に対応することにした。書き写す活動を入れることで、その後の音声でのやり取りの際、ワークシートを手がかりに、子どもたちが安心して話すことができると考えた。

また、どの時間にも振り返りの時間を確保し、その時間でどんな活動をして何を身に付けたかを子どもたち一人一人が考えられるようにした。特に、文字を扱う活動をした際には、その様子を見取れるような振り返りカードを用意した。

③検証授業の流れ

時間	指導過程	学習活動	指導上留意していた点
導入 3分	<ul style="list-style-type: none"> Warm-up Let's Chant "Can you swim?" 	<ul style="list-style-type: none"> 指導者と挨拶をする。 Can you~?の言い方に慣れるように、チャンツを言う。 	<ul style="list-style-type: none"> 目を合わせて笑顔で挨拶できるようにする。 全員で言ったり、担当を決めたりして、繰り返し口にするようにする。
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> Let's Write Let's Read 	<ul style="list-style-type: none"> 自分や前時までに尋ねた友達のできること／できないことをワークシートに書き写す。 自分の書いた友達の紹介文を読む。 	<ul style="list-style-type: none"> アルファベットの形や四線を意識して書かせるようにする。ワークシートにはない、使いたい単語を教える。 伝える相手を意識して言えるようにする。
まとめ 7分	<ul style="list-style-type: none"> 振り返り 挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> 書いたり読んだりしたことで気付いたことを振り返る。 指導者と挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちの英語を使おうとする態度面について良かったところをほめる。

④検証授業中の文字指導の様子

メインの活動として、自分や友達のできること／できないことを書き写すことを設定した。書くと言っても、I can / He can / She can の部分まではあらかじめ印刷されており、図7で示したようにワークシートに印刷されている単語の中から選んで、I can / He can / She can より後ろの部分だけを書き写すものである。書く内容については、それまでの時間に聞いたり話したりして、十分に慣れ親しんでいるものを使って情報を集めておいたものにした。

子どもたちが短時間学習での文字指導以外でアルファベットを書くことは初めてであった。3年生でローマ字を学習しているから、名前くらい書けるだろうと思っていたが、小文字をずっと練習してきたこともあり、苗字と名前の最初の文字を大文字にすることなどを忘れていて、全てを小文字で書いてしまう子どもも多くいた。これまでは、外国語活動の時間に使うワークシートには日本語で名前を書いていたので、今後のことも考え、四線上に書いたアルファベット表記の名前の手本を配ることにした。

自分や友達のできること・できないことを書き写す活動については、子どもたちが混乱しないように日本語で説明をした。He の横に男の子のイラスト、She の横に女の子のイラストを添えたことで、活動内容について理解する手助けになっていた。

実際に書き写す場面になると、戸惑いを見せる子どももいたが、友達がやるべきことを教えてあげたり、教師が声かけしたりすることで取り組み始めた。単語や文を書くことが初めてだったため、ピリオドの使い方や文字と文字の間隔を詰めて書くことなどの指導の不十分さが露呈してしまった。アルファベットを書くこと自体を嫌がる様子はなかったが、予定していた時間では多くの子どもたちが書き終えることができなかった。

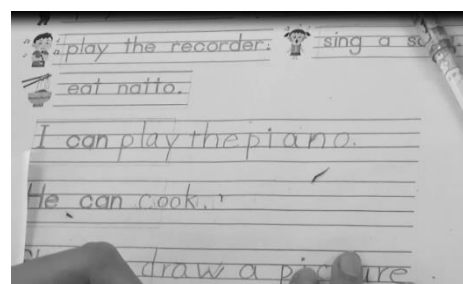


図8 ワークシートに書き写す様子

ワークシートにある単語以外のものを使いたい子どもについては、担任が個別に別紙に書いたものを渡した（図9）。それを見て、他の子どもがその言い回しを使ったり、他の文にも使ったりする様子も見られた。

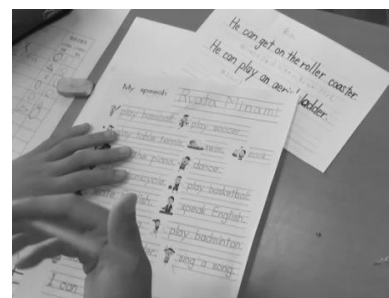


図9 ワークシートにある単語以外のものを使う様子

そして、最後に完成したワークシートを参考にしながら自分や友達のことを紹介する活動を行った。今までは、発表する場面でワークシートなどを持つことはなかったが、今回はワークシートを持たせた。そのことで、音声だけで十分に伝えられる内容だったのに、相手の顔を見ることが少なくなり、ワークシートを見て読み上げるような活動になってしまった。本来、文字に頼らずにできる活動であったのに、書くことを優先させたことで、書いたものに頼るようなことになってしまった。

⑤子どもたちの振り返りより

今までは、短時間学習でアルファベットを一文字ずつ書くことしかしていなかったが、今回、初めてアルファベットを続けて単語として書くことを行った。子どもたちにとってはハードルの高い活動になったと思うが、新学習指導要領外国語科の目標である「語順を意識しながら」に気付いた子どもや「四線上に書くこと」を意識している子どもがいた。

- 日本語と英語では、話す順番が違うから書き写すときに少し手間取ったけど、ちゃんと書けたし話せたのでうれしかったです。
- 英語で友達について紹介することができた。あと、最後にピリオドを付け忘れないようにした。
- 彼女・彼は何ができるというのを言えた。あと英語を写す時に段を間違えたりしちゃったので、しっかり覚えるようにしたいです。

(2) 検証授業2 B小学校4年生 Let's Try! 1 Unit 6 ALPHABET 関連

①学級の状況と検証授業までの取組

子どもたちは、1・2年生で年10時間ずつ、3年生で年15時間、4年生になってからは、月1回程度英語活動を経験してきている。担任と外部講師とのTTによる授業に取り組んでいる。

月1回程度なので単元としてつながりのある内容は難しく、前回取り上げた活動を毎日の朝の会などの短い時間でふれて、なるべく継続できるようにしている。例えば、What's this?という言い方を扱った後には、日直が3つのヒントを出してクイズを行ったり、教科を取り扱った後には、What subject do you like?と聞いたり答えたりということをしている。

また、子どもたちはアルファベットジングル¹⁸を言う活動を楽しみにしていて、Hi, friends! Plusにあるジングルの中のいくつかを言うことに慣れている。ジングルに出てくる言葉のジェスチャーをしながら言うなど、中学年らしく身体を動かしながら、英語に親しんでいる。

②検証授業計画

これまでは、特にアルファベットを取り上げた活動を行

表3 単元の流れ

時	目標と主な活動
第1時	<p>身の回りにはアルファベットの文字で表されているものがたくさんあると気付くとともに、活字体の大文字の読み方を知る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○Warm-up ○アルファベットの表示を見て何を表しているか考える ○身の回りのアルファベット大文字探し ○Let's Sing アルファベットの歌 ○アルファベットカード並べ ○スペリングゲーム
第2時 検証	<p>活字体の大文字と読み方に慣れ親しむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ○Warm-up ○アルファベットジングル ○Let's Sing アルファベットの歌 ○アルファベットカード並べ ○スペリングゲーム ○身体でアルファベット（人文字作り）

¹⁸ アルファベットジングルとは、デジタル教材でネイティブの発音に触れながら、アルファベットの文字には、読み方と音があることを知るとともに、様々な単語を言ったり聞いたりすることでアルファベットの音に慣れ親しむもの。A /æ/ /æ/ apple, B /b/ /b/ banana, C /k/ /k/ cat...のように発音される。

ってこなかったの、子どもたちは何となくその名前を知っていたり、身の回りのアルファベットの文字を目にしたりしているだけだった。

本単元では、図3で示したような段階を踏んだ文字指導として、アルファベットの大文字の名前や形に慣れ親しみ、複数文字のアルファベットに反応できるようになることを目標とした。本来、アルファベットを身に付けるには、短い時間で回数を重ねることが有効だとされているが、そのような時間のとり方が難しかったので、今回は45分×2時間で行う活動を組んだ。アルファベットの歌は、全校での英語の今月の歌に入っていることもあり、これまでも英語活動の授業とは関係なく歌ってきており、子どもたちにもなじみがある。

単元の最後の活動として、友達と協力して身体でアルファベットの大文字を作ること設定した。中学年の発達段階として、机上の学習だけでなく、身体を動かしながら活動することで、アルファベットの文字の形に注目することができる考えたからである。

③検証授業の流れ

時間	指導過程	学習活動	指導上留意していた点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・ Warm-up ・ アルファベット ジングル 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者と挨拶をし、天気や日付のやりとりをする。 ・ アルファベットジングルを言う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目を合わせて笑顔で挨拶できるようにする。 ・ アルファベットの文字の名前と音の違いを意識しながら言う。
展開 35分	<ul style="list-style-type: none"> ・ Let's Sing ・ カード並べ ・ スペリングゲーム ・ 人文字作り 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 色々な方法で歌う。 <ul style="list-style-type: none"> ①そのまま歌う ②選んだ色では、立って歌う ③逆から歌う ・ 大文字 26 枚のカードを大文字が印刷された台紙の上に置いていく。 ・ 担任が言った複数の文字を机の上に並べる。 ・ 友達と一緒に身体でアルファベットの文字を作る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アルファベットの文字の名前と形が一致するようにする。 ・ 必ず文字の名前を言いながら置くようにする。 ・ 文字の名前と形を一致させるようにする。 ・ 形に気を付けながら作るようにする。
まとめ 5分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返り ・ 挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アルファベットの大文字を学習したことで気付いたことを振り返る。 ・ 指導者と挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ アルファベットの形、名前、音についてふれていた子どもの振り返りを取り上げる。 ・ 子どもたちの英語を使おうとする態度面について良かったところをほめる。

④検証授業中の文字指導の様子

メインの活動として、身体でアルファベットの大文字を作ることを行った。それまでに、ジングルや歌で名前や音を繰り返し口にしたり、カード並べをしたりして、アルファベットの字形・名前・音の3つに慣れるようにした。この中で子どもたちが一番慣れ親しんでいるのは名前であり、字形も何となく目にしてきているが、MとNやMとW、GとQなどについては、やや不確かである。

図3で示したように、アルファベットの活動の最初の段階としてアルファベット一文字ずつだけでなく、複数のアルファベットに反応できるようになることが求められている。第1時では複数文字のカード並べとして、CD、JR、TVなどアルファベットの名前がそのまま単語になるものを取り上げた。そして、検証授業の第2時では、DOGやCATという名前がそのまま単語ではないものを取り上げ、並べ終わった後に、それが実は子どもたちがよく知っている単語だということを絵カードを使って意味を示した。子どもたちの中には、「CATだ。ニャーオ!」とすぐに気付いた子どももいたが、CATと並んだカードを見て、「カートかな?」と読もうとしている子どももいた。



図10 複数文字のカードを並べる様子

人文字作りの活動は、普段慣れている生活班のメンバーで行い、全員で形を作るのではなく、それを見てアドバイスする役があってもよいことにした。活動をイメージしやすいように、教員で人文字を作った写真を数枚見せた。写真を見ている途中から、子どもたちは組みたくて仕方がない様子だった。自分たちが作る場面になると、グループに提示された文字を見てすぐに、友達と肩を組んだり、床に寝転がって足を上げてみたりして、アルファベットの字形に近付けるにはどうしたらよいか試行錯誤していた。



図 11 人文字で Y を作った様子

グループごとに作った人文字を見せて、何のアルファベットか当てる活動では、見ている人に分かるように向きを考えたり、声をかけ合ったりしながら行っていた。作ることも楽しんでいて、こちらも大変楽しんで活動している様子が見られた。8グループが一文字ずつ担当して出来上がった言葉は **THE ANK YOU** であり、担任の仕掛けに盛り上がっていた。

⑤子どもたちの振り返りより

子どもたちにとって、アルファベットをテーマにした授業は初めてで、これまでは何となく身の回りで目にしていただけであった。今回の授業を通して、アルファベットを使う様々な短い活動をテンポよく行うことで、子どもたちは飽きずに繰り返しアルファベットの形を見たり、発音したりして慣れ親しめることが分かった。

振り返りカードからは、アルファベットの形や名前に慣れ親しみ、それが集まると単語として相手に情報を伝えることができるということに気付いている様子が見てとれた。

○色んな文字を合わせたら、一つの文字 (=言葉) になることが分かった。またどんどん覚えたいです。
 ○アルファベットの文字の形を身体で表すことができて楽しかったです。難しい文字と簡単な文字がありました。次は、自分の名前を文字を表してみたい。
 ○僕は、色々なアルファベットを並べて読むと、言葉を伝えられることが分かって良かったです。

また、外国語活動での協働的な学習を通して、友達のことを思いを寄せる姿勢やアルファベットの名前ともつ音の違いに気付き始めている様子もうかがえた。名前と音の違いについては、朝の会や授業で継続的にアルファベットジングルを扱ってきたことも一つの理由だと考えられる。

○最初はよくアルファベットの形ができなくて困っていたけど、うまくやれて良かったです。4人で力を合わせてできたし、友達のアファベットを見てみたりして楽しかったです。
 ○みんなのを当てるのがとても難しかったです。でも、みんなのを当てた時、とても嬉しかったです。
 ○アルファベットは色々ある。色々な読み方があると知った。

(3) 検証授業 3 A 小学校 6 年生 We Can! 2 Unit 6 What do you want to watch? 関連

①学級の状況と検証授業までの取組

検証授業 1 の後も Hi, friends! を使って週一回 ALT との TT による授業を重ねてきた。短時間学習では、アルファベットカードを使った活動や Hi, friends! Plus のアルファベットジングルを言う活動を続けてきた。また、書くことについては小文字の 26 文字を一通り練習したが、検証授業 1 より後の単元で単語や文を書くことは行っていない。

夏休み明けに、図 3 で示した文字の形や名前に慣れ親しむ段階が終わったので、音韻認識能力を高めるためのリスニングクイズを始めた。前述したように初めは戸惑う様子を見せた子どもたちであったが、数回行ううちにやり方に慣れ、最初の音に注意を払いながらよく聞いていた。答え合わせをして納得できないものがあると、“Number. ~, please.” と担任や ALT に再度聞くことを求める姿がよく見られるようになった。

② 検証授業計画

9月に公表された文部科学省の6年生用移行期教材である We Can! 2 Unit 6 をもとに、子どもたちの実態に合わせて、適切であると判断した活動のみ行うことにした。英語表現としては、どの競技を見たいかの理由を言う際に使う I like ～, I can ～ は、Hi, friends! でも扱っているが、I'm good at ～ と I'm in the ～ team. の表現は、紹介することにした。新しい表現ではあるが、担任や ALT の得意なことを知っている子どもたちは、ジェスチャーやその際に使う道具などを見ながら話を聞くことで、意味を理解できるのではないかと考えた。

検証授業1と同じように、45分授業と15分の短時間学習を組み合わせながら計画を立てた。この単元でもチャンツが使われているが、まだデジタル教材が公表されていないため、手拍子でリズムに乗せて表現を練習（リズムプラクティス）することにした。

このUnitで学習することとして、「東京オリンピック・パラリンピックについて興味をもつ」ことが示されている。東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることは知っていても、まだ3年後の行事であり、子どもたちにとって身近なものとは言えないかもしれないが、だからこそ実践して興味をもたせたいと考えた。また、オリンピックは知っていても、パラリンピックについてはあまり知らないことが予想される。最後の時間である検証授業の際には、それぞれで行われる競技の中から見たいもの一つずつを選び、音声でのやり取りを十分に行ってから書き写す活動を計画した。

表4 単元の流れ 第○時は45分授業、短○は15分の短時間学習

時	目標と主な活動
第1時	<p>スポーツに関する話を聞いて、内容が分かるとともに、スポーツに関する好みや得意・不得意について、聞いたり答えたりする。オリンピック・パラリンピックに関する話を聞いて内容が分かる。</p> <p>○リスニングクイズ ○Let's Watch and Think 1 ○オリンピック・パラリンピックで開催される競技を知る ○Small Talk を聞く ○Let's Play 1</p>
短①	○カルタ取りゲーム ○第1時で扱わなかった競技名の言い方
短②	○リスニングクイズ ○「～を見たい」の表現の練習 ○第1時で扱わなかった競技名の言い方
第2時	<p>見たい競技やスポーツについて、聞いたり答えたりする。</p> <p>○リスニングクイズ ○Let's Watch and Think 3 ○リズムプラクティス ○何が見たいのかの表現の練習 ○「～が見たいですか？」の表現の練習 ○Let's Talk</p>
短③	○リズムプラクティス ○カルタ取りゲーム
短④	○リスニングクイズ ○リズムプラクティス
第3時	<p>どんな競技を見たいかを尋ねる表現を使ってやり取りをする。見たい競技の理由の表現を知り、自分が見たい競技について理由を考える。</p> <p>○リスニングクイズ ○リズムプラクティス ○今まで学習した表現を使って友達とやり取りをする ○Let's Play 2 ○Let's Watch and Think 5 ○自分が見たい競技と理由の表現の練習</p>
短⑤	○リズムプラクティス ○Let's Read and Write
短⑥	○リスニングクイズ ○リズムプラクティス ○Let's Read and Write
検証 第4時	<p>自分の見たい競技や理由について伝え合う。自分の見たい競技名をワークシートに書き写す。</p> <p>○リズムプラクティス ○Let's Read and Write ○Activity 2</p>

③ 検証授業の流れ

時間	指導過程	学習活動	指導上留意していた点
導入 10分	<ul style="list-style-type: none"> ・ Warm-up ・ リスニングクイズ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者と挨拶をし、天気や日付のやり取りをする。 ・ リスニングクイズを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 目を合わせて笑顔で挨拶できるようにする。 ・ 例と同じ初頭音の単語を集中して聞き分けさせる。
展開 32分	<ul style="list-style-type: none"> ・ リズムプラクティス ・ Let's Read and Write ・ Activity 2 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手拍子をしながらか、使う表現の言い方に慣れ親しむ。 What do you want to watch? I want to watch ～. ・ 自分が見たい競技の言い方と理由を練習し、他の班の友達と音声でやり取りをする。 ・ ワークシートに自分の見たい競技名を書き写す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全員で言ったり、担当を決めたりして繰り返し口にするようにする。 ・ 相手に見たい競技やその理由が伝わるように意識して言うようにする。 ・ 自分の見たい競技について手本を見ながら丁寧に書き写すように声をかける。
まとめ 3分	<ul style="list-style-type: none"> ・ 振り返り ・ 挨拶 	<ul style="list-style-type: none"> ・ やり取りをしたり、書いたりしたことで気付いたことを振り返る。 ・ 指導者と挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 子どもたちの英語を使おうとする態度面について良かったところをほめる。

④検証授業中の文字指導の様子

検証授業1を踏まえ、今回は音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句を書き写す活動を単元の最後に位置付けた。隣の席の友達や他の班の友達と何度も音声でやり取りをして、子どもたちが音声で十分に慣れ親しんでから、自分が選んだ競技名だけを書き写すようにした。

活動の後にこのワークシートを掲示することで、音声でやり取りをしなかった友達がどの競技を見たいと思っているか、またその理由を知ることができる。文字に記して残すというのは、時間や場所を超えた相手とコミュニケーションすることができる利点があり、書くことの原因になる。

今回のワークシートには、オリンピックとパラリンピックそれぞれから一競技ずつ見たいものを選び、その競技名のみを書き写せるようにした(図12)。

図12 書き写すワークシート

I want to watch までがあらかじめ薄く印刷されており、それをなぞって、最後に見たい競技を選んで書き写すものである。競技名については、ピクトグラムと競技名が書いてあるシートを別に用意し、それを見ながら書き写すようにした(図13)。

前回の検証授業でアルファベットを扱い始めてから、継続的にアルファベットに触れたり、一文字ずつ書く練習を積み重ねたりしてきたこともあり、子どもたちはそれほど戸惑うことなく書き写す活動に取り組めた。子どもたちが意味を考えながら書き写しているかを確認するために、担任は机間指導しながら子どもたちに“What do you want to watch?”と尋ね、それに対する子どもたちの答えと書き写しているものが一致しているかを見取った。

図13 競技名お手本シート

検証授業1の時と比べると、英語らしく、アルファベットを詰めて単語として書くことができるようになってきている子どもが多かった。また、自分の名前については、四線上に書かれたお手本を見ながら書くことで、ほとんどの子どもが読みやすい文字で書けていた。文の最後にピリオドを付けることは、授業の最後に改めて担任から伝え、書き加えて文を完成させた。

⑤子どもたちの振り返りより

6年生の後半になり、音声だけでやり取りをすることに慣れている子どもたちではあるが、書くという活動が入ることで、新しいコミュニケーションの方法を体験し、文字で書き残すことの良さを味わうことができたようだった。また、文字に表わしたことで、今までの音声だけのやり取りでは気付かなかったことに気付いた子どももいた。

- 理由を尋ねて聞くと、英語だと難しく理解できないものも少しあった。書くのは、言葉で言っているよりも理解しやすいと思った。
- 書くことで、日本語と同じように見る人にとって、とても分かりやすいことが分かりました。
- 文末には、ピリオドを使うことが分かった。
- ローマ字でスポーツの名前を書くものがあるのに気付いた。そのものは、日本で生まれたスポーツであることが分かった。

アルファベットを書くことについては、子どもたちが時間をかけて段階的に文字に慣れ親しんできた結果、書き写す活動ができたことに充実感を感じている様子が見えかけた。書くことが入ることで、外国語活動の授業に新たな楽しみをもって取り組もうとする意欲が見られた子どももいた。

- 書くときちゃんとマス目に気を付けて書いた。あと、間をあけるようにした。
- 英文を書いてみて、ここは長く、ここは下にとかを分かるようになって良かった。
- 英語を書く機会はほとんどないので難しかったけど、最初に練習したので、書くことができました。
- 僕は普段、英語を使って話したり書いたりすることはないので、やってみて楽しかったです。

そして、この単元を学習して「東京オリンピック・パラリンピックについて興味をもつ」ということができている子どももいた。外国語活動の時間を通して、新しいことを知ったり、コミュニケーションの大切さや楽しさを実感できたりするというのは、高学年の知的好奇心に合った内容であり、意欲をもって取り組める題材であることが分かった。

- 私の知らなかった競技も英語を通して知ることができた。
- 日本語と違う方が逆に一生懸命に伝えようと思えて頑張れた。
- 2020年には多くの外国客が来ると思うから、より英語ができるよう勉強していきたい。

授業後しばらくしてから、書き写したワークシートを教室内に掲示した。文字に書いて残すことで、授業中に直接やり取りができなかった相手の見たい競技やその理由を知ることができたり、自分が書いた英文を改めて見て、満足したりしている様子が見えた。

- みんながどんな競技を見たいか知れて良かった。
- あの人がこの競技を見たいというのが意外だった。
- 自分が書いたアルファベットが意外にきれいに見えた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

小学校外国語教育において、音韻認識能力を高める活動を取り入れて、段階的に文字を扱ったことは、子どもたちが文字に慣れ親しむ上で有効だった。このことは、7月にはまだ時間的に慣れ親しんでいない状態だった6年生の子どもたちがその後も段階的にアルファベットに慣れ親しんでいったことで、11月には音を意識しながら、書き写す活動にスムーズに取り組めるようになったことから判断できる。

これまでは、聞くことと話すことのみで進められてきた外国語活動であったが、6年生も後半になるとやり取りが増え、その内容を書いたメモを自主的に作る子どもも見られた。今後、高学年の外国語科や中学校以降の外国語科ではもちろん、子どもたちは文字の入った教材を使うことになる。その際、初めて見る英単語や英文が並んでいても圧倒されることのないようにしておきたい。そのためには、ただ単にアルファベットをひたすら書いて練習したり、暗記に頼ったりという方法は適切ではない。日本で教育を受けてきた者が平仮名やカタカナ、漢字を身に付けてきたように、段階的、系統的な指導をしていく必要がある。

今回初めて、ある一定期間、外国語活動の中で文字を扱うことに取り組んだ。小学校3年生でローマ字を学習していることや身の回りにアルファベットがあふれていることを考えると、高学年でアルファベットを一つ一つ取り上げて指導する必要はないのではないかと感じてしまう。現行の学習指導要領¹⁹には、「アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること」と記されているように、Hi, friends!を使って指導していても、アルファベットに触れるのは、ほんの少しの時間だけだった。

6年生でもアルファベットを一文字ずつ扱ってみると、特に小文字では不確実なものがいくつかあった。4年生で行ったようなカード並べをるところから取り組んでみたが、検証授業までの取組の項にも書いたように、担任から見ればだいたい身に付けている様子でも、子ども自身はなかなかアルファベ

¹⁹ 小学校学習指導要領解説 外国語活動編 文部科学省 平成20年8月 p.19

ットの字形や名前を身に付けたと自信をもてる状態にはならなかった。そのことで、6年生であっても、子どもたちはカード並べをするのに飽きる様子はなく、何度でも繰り返し取り組むことに意欲を見せていた。教員が焦らずに丁寧に段階を踏んで指導することで、次の段階に進むことができた。

新学習指導要領では、3年生でアルファベットの大文字、4年生でアルファベットの小文字を扱うことになる。ある単元ということではなく、アルファベットを扱う単元以降で時間をかけて、少しずつ慣れ親しませていくことになっている。検証授業を行った4年生の学級の子どもたちは、それまでには3年生の国語でローマ字を学習している。身の回りにアルファベットがあふれていることを思うと、教員は子どもたちにある程度の定着を期待してしまうが、カード並べなどの活動で確かめてみるとしっかりと認識しているという訳ではなく、あやふやなものがたくさんあった。前期中は大文字、後期に入ってから小文字のアルファベットカードを扱った。短い時間で扱ったこともあり、子どもたちは飽きることもなくカードの並べ替えをしたり、いくつかを並べて言葉を作ったりすることをしてきた。今まで聞くことや話すことだけで消えてしまっていた言葉が文字になって見えることが楽しい様子であった。

音韻認識能力を高めるために、リスニングクイズを取り入れた。これは、アルファベットの文字を身に付けた子どもたちがこれまでに慣れ親しんだ音と文字をリンクさせる活動である。アルファベットの文字や形に十分慣れ親しみ、複数のアルファベットに反応できるようになった子どもたちが今まで絵カードなどで何となく目にしていた文字と音を結び付けることのできる活動になっていた。検証授業で実際に取り組んでみて、子どもたちが音により注意を払って英語を聞いたり、文字を見て音を予想してから聞いたりしている様子が見てとれた。アルファベットには、名前・字形・音の3つの要素がある。これまでの指導で、名前と字形には目を向けることはあったが、その持つ音に注目させるということは意識されてこなかった。リスニングクイズのように、音に注意して聞くことに特化した活動を取り入れて、文字指導に組み込んでいくことで、子どもたちが段階的に文字に慣れ親しめることが分かった。



図14 リスニングクイズの様子

リスニングクイズのシートには文字が書かれているが、テストではなく、クイズという名前で行ったこともあり、子どもたちは構えることなく取り組んでいた。それでも6年生らしく、正解に納得がいかないともう一度音を聞きたいと自分からリクエストしていたように、やはり「音を正しく認識したい」という気持ちが見られた。

子どもたちのアンケート(34名)を見ると、9割近くの子どもたちが言葉の最初の音に気を付けて聞いたり、8割近くの子どもたちがその違いに気付くことができたりしていたことが分かる。また、半分以上の子どもたちが「リスニングク

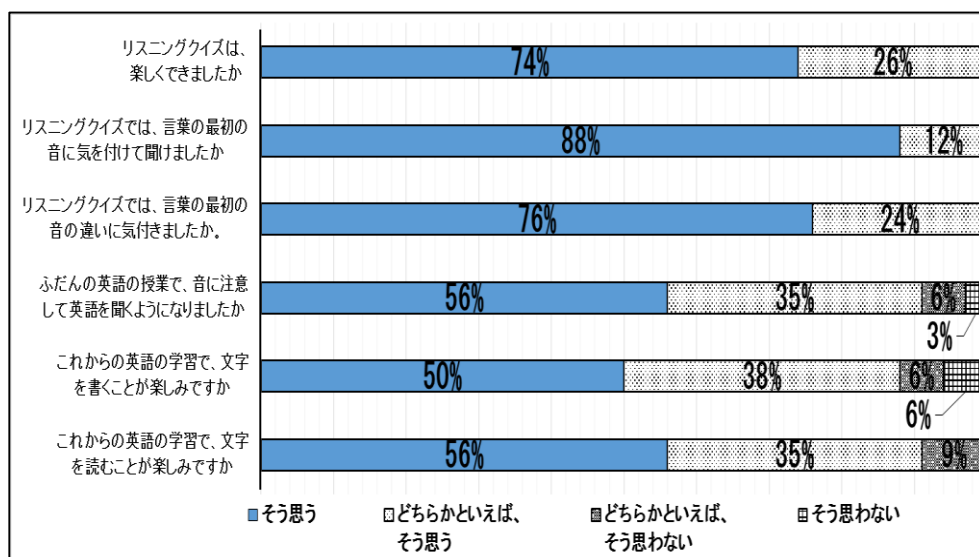


図15 リスニングクイズ後のアンケート(12月実施、34名)

イズをきっかけにして、普段の授業でも英語の音に注意して聞くようになった」と回答していることから、少しずつ英語の音と文字の関係に気付き始めたと思われる。さらに、これからは自分が音声でやり取りしたことを書いたり、友達のものを読んだりしたいという思いをもっていることも分かった。

学級担任が指導する外国語教育で、英語の音を指導することは、ハードルが高いものと思われるが、その部分はALTに担当してもらったり、録音したものを利用したりすることで取り組めるようにした。リスニングクイズの活動の流れは毎回同じものであるので、教材が完成してしまえば、短時間学習の中で、担任一人だけで行ったとしてもそれほど負担にはならないと思われる。

2 今後の課題

今後、時間数が増え、高学年は外国語科になっても指導を主に担当するのは、学級担任である。これまでの外国語活動と同じように、学級担任が行うメリットはいくつもあるが、これまでと比べると扱う単語や英文の量が増えることもあり、学級担任自身の英語力を上げていく必要がある。また、これまでは高学年のみの外国語教育だったが、中学年から外国語活動が始まり、学校全体の2/3の教員が関わることになる。校内で研修を行ったり、指導計画や指導内容の情報を共有するなどの校内体制を整えたりして、協力して英語力や指導力を上げていくことがますます求められるだろう。

文字指導に関して、学級担任は3年生の国語でローマ字を扱ったり、何か調べものをする際にパソコンでローマ字入力をしたりするという他教科の内容を把握している。子どもたちがローマ字を身に付けていることで、英単語を読むことに興味関心をもつことは明らかになっているが²⁰、ローマ字は英語とは違うということなどをどこかで子どもたちに伝えることは必要になってくる。ローマ字を学習しているからと言って、子どもたちがアルファベットも理解できるだろうという前提で指導するのは適切ではない。ここまで述べてきたように、高学年でも一文字ずつ扱うことから始め、複数文字への慣れ親しみを経て、一文字ずつ丁寧に書く練習をしていくということを行いたい。しかし、読むこと、書くことについては、聞くこと、話すことのレベルと同じものは求められていないということも忘れないでおきたい。

また、「文字指導」という言葉を見てしまうと、いかにアルファベットを正しく書けるように指導するかと捉えがちだが、文字はコミュニケーションを図ることの一つの手段である。音声でのコミュニケーションがないのに、先に文字を書かせようとしたり、音もなくただ単語や文を書き写す活動をしたりするのは小学校外国語科の目標にはそぐわないと考える。聞いたり話したりしたら、少しだけ書く。書いたらそれを声に出したり聞いたりするというところを行って、授業の中で常に音がある状態にしておきたい。

これまでの外国語活動では、聞くこと、話すことを中心に行ってきたが、これからは中学年の外国語活動からアルファベットに慣れ親しむ活動を始め、高学年の外国語科では読むこと、書くことの領域にも取り組むことになる。これまで70単位時間だった外国語教育が小学校終了段階で210単位時間になり、3倍の時間を費やすことになる。外国語活動を経験して中学校へ入学した子どもたちは、中学校英語科教員から「英語の音声に慣れ親しんでいる」「英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育っている」²¹という良い面をもっていることを評価されてきたが、これからはそれに加え文字に触れてから進学することになる。

しかし、子どもたちが学習した内容について、何も見ずに綴りを書いたり文を書いたりできるようになって小学校を卒業する訳ではない。文字を見ても「分からない文字がたくさん書かれていて、嫌だな」

²⁰本田勝久・小川一美・前田智美 「ローマ字指導と小学校英語活動における有機的な連携」 2007年 p. 9

²¹ 大野彰子 「小学校英語教育に関する調査研究報告書」 国立教育政策研究所 2017年 p. 2

とは思わない程度だと考える。小学校と中学校が学習内容についてお互いに正しい理解をして、共通認識の上に外国語教育を行わなければ、中学校で子どもたちの文字認識力を過剰に期待して、急にレベルの高いことをさせてしまうことが予想される。本研究会議では、リスニングクイズとしてアルファベットのある子音で始まる単語を聞き分ける活動を行ったが、英語の音は単独の子音だけではない。連続する子音や母音もあるが、それらは扱えなかった。しかし、文部科学省が公表した新教材には一部、音と文字をリンクさせる活動が取り入れられているので、担任がその大切さを理解して活用したり、今回作成したリスニングクイズの続きとなる教材を開発したりすることも考えられる。今後、中学校での外国語教育に向けて、引き続き段階を踏んで、音韻認識能力を高める活動を行いながら丁寧に文字指導を行うことができれば、子どもたちは文字を認識しやすくなり、その先の多く単語や文の理解につながると考えられる。これまでも小中連携は言われてきたことだが、今まで以上に、単なる情報交換にとどまらず、学習内容に踏み込んだ連携をしていく必要があるだろう。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援、ご助言をくださいました講師の先生方、また、校長先生を始め学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考文献】

- | | |
|---|-------|
| アレン玉井光江『Little Readers 1』 小学館プロダクション | 2003年 |
| 本田勝久・小川一美・前田智美 「ローマ字指導と小学校英語活動における有機的な連携」 | |
| 大阪教育大学紀要 | 2007年 |
| アレン玉井光江『小学校英語の教育法—理論と実践』大修館書店 | 2010年 |
| 樋口忠彦『小学校英語教育の展開—よりよい英語活動への提言』研究社 | 2010年 |
| 川上典子「英語教育における小中連携：文字指導のあり方」 | |
| 鹿児島純心女子大学 国際人間学部紀要 | 2014年 |
| 真角美穂・立花奈巳「実感を積み重ねていく小学校外国語科学習指導の在り方—チャレンジリストの活用と短時間学習の実践を通して—」福岡市教育センター | 2017年 |
| 文部科学省『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 | 2017年 |
| 大野彰子「小学校英語教育に関する調査研究報告書」 国立教育政策研究所 | 2017年 |
| 吉田研作『小学校英語教科化への対応と実践プラン』教育開発研究所 | 2017年 |
| 酒井英樹・滝沢雄一・亘理陽一『小学校で英語を教えるためのミニマム・エッセンシャルズ』 | |
| 三省堂 | 2017年 |

【指導助言者】

- | | |
|--------------------------------|---------|
| 青山学院大学文学部教授 | アレン玉井光江 |
| 東京家政大学人文学部教授（川崎市総合教育センター専門員） | 太田 洋 |
| 川崎市立小学校国際教育研究会長（川崎市立はるひ野小学校長） | 佐藤 公孝 |
| 川崎市立中学校教育研究会英語科部会長（川崎市立金程中学校長） | 金子 勉 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 伊藤 敏明 |